

授業の組織的展開のための共通教案開発

—— 初年次教育の事例から ——

鈴木 浩子*

1. はじめに ～ 共通教案開発の必要性

今日の大学教育は「各教員の属人的な取組から大学が組織的に提供する体系だったものへと進化させ、学生の能力をどう伸ばすかという学生本位の視点に立った学士課程教育へと質的な転換を図る」ことが求められている。2012年の中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」（文部科学省2012）では、教員中心の授業科目の編成から学位プログラム中心の授業科目の編成への転換の必要性が提起され、教員個々の教育力の向上に加えて、「教員が組織的な教育に参画しこれに貢献すること」が求められた。また初年次教育やキャリア教育等、学部を超えて授業科目を大学全体として実施する必要性も高まっている。そのためは、複数の担当教員を確保し、教員間の理解や意欲の質的均一化を図ることが大きな課題である。

複数クラスでの授業実施の場合、教育目標・到達目標を共有して個々の教員が各々の授業内容で授業を行う方法と、統一教材を用いた共通の授業デザインで全クラスが授業を行う方法に大きく分かれる。個々の教員にとって、慣れない授業進行や教育方法を用いることになる「統一教材による方法」は負担が大きい。しかし、初年次教育やキャリア教育等の、全学生必修で少人数クラスによるアクティブラーニング型授業を組織的に実施するといった取り組みが増加することを考えると、統一教材の必要性が高まることは必至である。また、汎用能力を意識したカリキュラムは増加しており（山田2016）¹、それらは、授業内での学生同士、学生と教員との対話や意思疎通という授業プロセスを通して修得されるものが多い。この点からも、統一教材、共通の授業デザインの必要性は高い。

このような組織的展開のためには、継続的な授業改善とともに、担当教員に対するFD（事前研修会）の実施が必要であり（鈴木ほか2017）、研修会の基本となるのが、授業の進め方や教育方法についての説明を記述した指導案（教案）である。複数の担当教員にとって、理解しやすく、授業が進めやすく、さらに担当意欲を維持できる教案を開発することは、授業の組織的な展開の成功のためには欠かせない。

明星大学では2010年度から、1年生前期初年次必修科目「自立と体験1」を学部学科横断少人数クラスで開講している。授業は、各学部の専任教員50～55人を中心に、当該授業を統括する明星教育センター（以下MEC）の特任教員等が担当する。開講から8年間の担当教員の延べ人数は420人、全学の専任教員の約8割に達している。専任教員の担当期間は1～2年であり、アクティブラーニングや体験学習の未経験者も多いため、MEC教員が共通教案、共通教材を作成し、継続的な授業改善に取り組んできた。毎年授業終了時には担当教員にアンケートを依頼し、できるだけ実際の担当者的心声を反映させる形で、教案も改善を重ねてきている。理解しやすく授業が進めやすい教案については教員個々の嗜好はあるものの、8年間の実践を経て、一定の方向性が見えてきている。

本研究ノートでは、これまでの教案の改善プロセスを振り返りながら現状の教案を点検し、複数教員によりアクティブラーニング型授業を実施する際の共通教案開発に対してガイドラインを示唆することを目指す。また共通教案を活かすための授業運営についてもふれておきたい。

* 明星大学明星教育センター常勤教授

2. 先行研究からの示唆

共通の指導案を用いて組織的な授業運営を行った例としては、久留米大学(安永、石川、満園2006)の「共通演習」がある。学長直属の教育・学習支援センター(KCLT)が共通シラバス、共通の達成目標、共通テキスト、標準的な指導案を作成し、各学部から選出された42名の教員が授業を担当する形式である。この指導案は、あくまでも参考例であり、担当教員が独自に工夫を凝らした指導を展開することが認められていた。安永らは、初年度の実践から指摘された問題点として、①クラス編成、②授業の画一化、③担当教員の専門性、④教員の担任的役割、⑤実践的FD、⑥「共通演習」企画段階の手続きの問題の6点を挙げている。このうち指導案に関する問題点は、②の授業の画一化である。「教材は担当教員各自がつくるべきであり、また大学には『指導案』などありえない」という意見に対して、安永らは授業の「質の保証」と担当教員の「主体性」が問題だとして、次のように述べている。「すべての担当教員が主体的に授業改善に取り組み、必要最低限の質を保証できるのであれば、シラバスやテキストの共通化や指導案の例示は必要ない。しかし「共通演習」を導入する段階において一定の画一化は必要であると判断した。」また、「新しいことを試みる際、形から入ることは極めて効果的」とし、専門が異なり授業の実施に不安を持っていた多くの担当教員にとって「指導案」を手がかりに自分なりに工夫して指導に当たることは望ましいと指摘している。反対意見はあったとしても、複数教員が自身の専門外の授業を担当し、大学全体で組織的に展開する場合には、標準的な指導案(共通教案)は効果的な教育支援ということが分かる。

大手前大学で2007年度に開講した初年次必修科目の1つ「情報活用」では、一学年およそ800名を24クラスに分け、1クラス20～40名程度でクラスを編成し、複数教員が統一カリキュラムに基づいて授業を行った(近藤2010)。科目の目標設定、教材・課題の選定や作成は科目コーディネーターが外部機関と協働して行い、科目担当教員への連絡等も担当した。さらに情報共有のために毎回授業の前後10～30分程度を利用し、その日の担当教員によるミーティングを行い、それが日常的なFDの場として機能した。2007年度末に教員個別の取り組みを共有するFDを行い、それを踏まえて2008年度、2009年度を実施、2010年度は3年間の実践をもとにコーディネーターが統一の授業計画と課題を作成し、担当教員とのミーティングで意見交換を行うというプロセスで組織的な運営を整備している。初めて組織的な運営を行っていく際には、共通シラバス等の大枠を定めた上で、実践の中で日常的な改善を繰り返し、ある程度の実践の後に統一の教案を確定させるという方法が現実的だということが分かる。

3. 初年次教育「自立と体験1」における共通教案開発の経緯

「自立と体験1」は、共通シラバス、共通の教育目標、到達目標、行動目標が定められており、学生向けのポートフォリオ、教員向けの教案を用いて、主に各学部の専任教員が授業を実施する。このポートフォリオ、教案とともに、授業内で配付するシート、授業資料(模造紙、マーカー、ポストイット、マグネット、タイマー等)もすべてMEC教職員が準備を行う。各クラスには1～2名のスチューデントアシスタント(SA)を配置する。

開講にあたっては、2008年12月諮問委員会発足、2009年3月大学評議会で設置承認、2010年2月実施案承認と手続きが進められた。2010年4月の開講までおよそ1年で、授業内容、ポートフォリオ、教案が準備されたことになる。開講と同時期に附属研究機関として明星教育センター(MEC)が開設され、「自立と体験1」の授業運営を統括することとなった。5名の特任教員が採用され、センター開設と同時にこの授業に関わった。

表1 「自立と体験1」 教案開発経緯 (2010年度～2017年度)

年度	ページ数	掲載内容	前年度からの改善点
2010	18	シラバス、教案・授業の進め方説明、グループで行う学習の技法について、各回授業説明(各回1ページ)	
2011	49	シラバス、教案の見方、授業内容・進め方説明、授業のルール、グループ学習の方法、課題提出について、自己成長チェックリスト、各回授業説明(各回2ページ)、授業運営におけるヒント	①学生のポートフォリオに合わせて授業に関する説明方法を解説したページを追加。 ②各回授業説明を見開き2ページとし、情報量を増やす。 ③授業運営におけるヒントを追加。 ④教案の見方の解説ページを追加。
2012	51	担当教員向けメッセージ、シラバス、授業内容・進め方説明、体系的キャリア教育プログラム、授業のルール、課題提出について、グループ学習の方法、「学ぶ力」自己点検シート、各回授業説明(各回2ページ)、授業運営におけるヒント、教案の見方	①表紙裏に担当教員向けメッセージとして授業の意味と教案の活用方法についての説明を掲載。 ②各回授業説明のページに、「<教員向け>学生に習得してほしいこと」を追加。 ③この年度から製本仕上げとする。
2013	57	担当教員向けメッセージ、シラバス、授業内容・進め方説明、体系的キャリア教育プログラム、授業のルール、課題提出について、グループ学習の方法、「学ぶ力」自己点検シート、授業の始め方【モデル】、SA/TAの役割、各回授業説明(各回2ページ)、授業運営におけるヒント、教案の見方	①授業に関する情報を追加。 (授業の始め方【モデル】、SA/TAの役割)
2014	57	大きな変更なし	大きな変更なし
2015	57	大きな変更なし	印刷をモノクロから2色印刷に変更
2016	57	大きな変更なし	①各回授業説明のページに、教案のプランを変更して授業を実施する際の例を記載。
2017	57	大きな変更なし	大きな変更なし

※授業内容についても毎年改善が試みられている。それに伴う教案の修正については、ここには掲載しない。

教案・ポートフォリオは、毎年細かい改善を重ねてきている(表1)。特に1年目、2年目、3年目は大きく変更し、4年目からはほぼ現在の形に整った。その後も、担当教員のランチミーティング、担当教員アンケート、MEC 教員間の検討を通して、日常的な改善を行っている。

4. 共通教案開発上の課題

初年度の教案は、各回授業説明が1ページに掲載され、授業内容の説明も少なかった。そのため、毎回の授業時に「補足資料」を配付した。2年目はその補足資料の内容を教案に取り入れ、各回授業を見開き2ページで記載するようになった。

左ページには、授業のねらい、今日の内容、必要資材、タイムスケジュール(時間・内容進め方・方法・備考)、授業進行の留意点を掲載し、授業の流れとその中で実施することが一覧できるようにした。アクティブラーニングの授業進行に慣れている教員であれば、こちらのページを見るだけで、授業が進められることを目指した。また事前に教案で予習をしたうえで、当日は授業を進めながら左ページで進行を確認することもできる。

右ページには、授業項目(セッション)ごとの意図(ねらい)、進め方例を詳細に記載し、初めてアクティブラーニング型の授業を実施する教員にもイメージがしやすいように意識して作成した。初年度の教案にあった「本授業の基本方針」は、セッションごとに分けて右ページに「このセッションの意図」として記載した²。なお「このセッションの意図」については、教員が流れを理解するためのものであり、学生にワーク前に伝えたりこのまま板書したりはしないようにという注意書きを加えた。

さらにグループワークの授業を行う際に役立つ Tips を、巻末に「授業運営におけるヒント」として掲載した。「グループ学習とは」といった解説的なものから、「机の配置」「グループ分けの方法」「アイズブレイ

ク」「グループ学習における板書について」等、非常に具体的に、アクティブラーニング型授業を行う教員の助けになる内容を掲載している。

教案のページに説明書きを入れる形で、「教案の見方」も掲載した。各項目の意味と、活用の仕方が具体的に記述されている。また、教案は授業を実施する際の参考であり、記載されている時間は守らなくてはならないルールではなく、あくまでも進行の目安時間であると説明した。共通教案であるが個々の教員の工夫を前提としており、画一的な授業実施を目指すものではない³。

実際のところ、この点が最も伝わりにくい点であり、教案について最も多い意見であった。15回授業終了時に担当教員にアンケートを依頼し、その中で授業運営について、「役立ったものは何でしたか?」と尋ねている。授業運営サポートのために準備された項目が上げてあり、その中から複数選択してもらい、さらに具体的に役立った点を自由記述してもらう形式である。このアンケートを見ても、「教案を全て時間通り実施しなくてもよい」という意図は伝わっていないことが分かる(表2参照)。

表2「自立と体験1」教員アンケート 教案についての意見(2010年度～2017年度)⁴

年度	回答数	教案が役に立った(%)	教案についての自由記述(抜粋)
2010	40	28(70%)	<ul style="list-style-type: none"> 初めての担当で慣れなかったので、授業理解と授業進行の助けとなった(同様意見11件) 教案による授業の規格化により全ての学生に均等に必要教育を行うことができた(同様意見2件) 補助教材で、適宜内容の修正があったことは良かった 教案の変更等が頻繁で対応に苦慮した 授業内容をより統一的なものにするためには不可欠と思うが、授業をマニュアル化させてしまう作用が強くなってしまった。(同様意見1件)
2011	29	27(93%)	<ul style="list-style-type: none"> 授業内容や時間配分を把握するのに役立った(同様意見12件) 教案が細かいと学生が理解する前に次の課題に行くことがあった(コンテンツが多い等の同様意見2件) 教案一冊にすべて見やすくまとめてほしい(同様意見1件) 初年次教育の進め方については、各教員の裁量枠を広げるか、専門教員に一任するのが妥当ではないか。
2012	36	28(78%)	<ul style="list-style-type: none"> 教案は時間がタイトに設定されているが、これがあれば授業ができるという安心感がある 事前準備や授業進行等に役立った(同様意見4件) 教案は参考になるが、書き方が分かりにくい
2013	16	15(94%)	<ul style="list-style-type: none"> 教案があるので不安感なしに取り組めた 教案・ポートフォリオは必須(同様意見3件) 教案はがんじがらめな気がする。もっと教員の自由裁量に任せてもよいと思う。 初めて担当する場合、これだけ出来上がった教案があると逸脱は難しい(同様意見1件)
2014	38	37(97%)	<ul style="list-style-type: none"> 教案は授業をする上でとても役立った(同様意見2件) 教案は説明を簡便に整理した方が使いやすい(同様意見1件) 運営上のしびりが強すぎるかもしれない。
2015	43	29(67%)	<ul style="list-style-type: none"> 教案、ポートフォリオを同時に開くのは使いづらい 誤表記がある(同様意見1件) 教案に授業開始何分後かのタイムテーブルがあるとよい グループ替えのタイミングを具体的に教案に入れ込み、自己紹介の時間もきちんと入れたタイムスケジュールがあるとよい
2016	24	23(96%)	<ul style="list-style-type: none"> 教案は初めて担当する教員にとって、授業の見通しを持つことができ大変ありがたかった。また授業の共通実践にもつながる 教案がぎっしり詰まっていて、なかなか予定した時間通りにすすめられない。教案通りに進めると80分くらいで授業が終了し、残りの10分間は教員の裁量で使える時間が取れるとよい 教案の各時限のねらい・内容については良く考えられていると感じた。ただしもう少し学生にしっかり考えさせる事案が欲しいと感じた
2017	21	19(90%)	<ul style="list-style-type: none"> 授業の進め方をイメージする上で教案は役に立ちました 教案はよく練られたものになっていると思う ポートフォリオと教案が1冊になっているとありがたい

例えば「教案が細かいと学生が理解する前に次の課題に行くことがあった(2011年度)」という意見からは、学生の状況に関わらず、教案の時間通りに次の課題に取り掛かっている様子が分かる。「教案はがんじがらめな気がする。もっと教員の自由裁量に任せてもよいと思う(2013年度)」からは、「その通りに実施すべきもの」として教案を理解している様子が分かる。「初めて担当する場合、これだけ出来上がった教案があると逸脱は難しい(2013年度)」という意見は、まさしく「教案を頼りにしながらも、教案に縛られる」という担当教員の葛藤が感じられる。「教案に授業開始何分後かのタイムテーブルがあるとよい(2015年度)」「グループ替えのタイミングを具体的に教案に入れ込み、自己紹介の時間もきちんと入れたタイムスケジュールがあるとよい(2015年度)」のように、さらに詳細に教案をつくってほしいという意見もあり、それぞれの担当教員が教案をどのように使うかによって意見が異なることが分かる。

授業開講当時の特任教員5名のうち3名は企業研修の経験があり、そのため共通教案で授業(研修)を実施した経験もあった。教案(研修実施案)はあくまでも実施プランであり、受講者の状況によってはプラン通り実施しないこともあり、またプランには実施可能な様々なアイデアが記載されているが、それらもすべてを実施する必要はないので取捨選択して実施するといった考え方を持っていた。ところが、これらは共通教案に慣れていない大学教員にとっては馴染みのない考え方であり、教案の記述が詳細になったことで「そのとおり実施しなくてはならない」という制約となってしまった。この点については、事前説明会や担当教員に毎週配信するニュースレターでも繰り返し、「教案はあくまでもプランであり、その通り終えることが目標ではない」というメッセージを伝達し続けてきている。また2016年度以降は、教案のタイムスケジュールの欄や進め方例に、省く選択ができる項目や次週に回しても構わない項目について、具体的に注意書きを入れた。結果的に教案はさらに詳細になったが、現状の解決策としてはこの方法が適当と考えられる。

第3回 <大学での学びを考える> ポートフォリオ提出日です 2017年4月28日(金)ノ28日(土)		必要教材	
<学生向け> 授業の進め方 ノートの取り方について学ぶ	大学での学びについて考える ノートの取り方について学ぶ	ボストロイト と印刷機 と4用紙	ペン
今日の 授業内容	1. 大学・大学生について考える 2. 情報読解・ノートの取り方 3. 振り返り	資料1「ノートの取り方の基本」 ボストロイト持ち帰り用の紙	
<教員向け> 学生に習得してほしいこと	自分にとっての大学の意義や主体的に学ぶという視点から考えてみる ノートの取り方の基本を身につける	ボストロイトを使って考えたい	
時間	内容・進め方	方法	備考(担当教)
30分	今日の授業実習内容について 1) 授業の進め方について 教員の振り返り、教員の振り返り又はアイスブレイク	講義 発表リレー	アイスブレイクゲーム 「開学大学を色で表せ」
30分	1. 大学・大学生について考える <CR> (個人→グループ→全員) 1) 個人で考える (10) 2) 発表リレー (10) 3) 大学とは (10)	1) ボストロイト配入 2) 発表リレー 3) 振り返り	ワーク①: 大学・大学生について考える p.88 コラム「大学とは」
60分	2. 情報読解・ノートの取り方 <CR> (情報読解→グループ→個人) 1) 授業を聴く (10) 2) 進め方説明 (10) 3) 情報読解実践: ノートを取る→グループ内質疑 2) ノートの取り方を考える (10) 3) ボストロイトの正しい使い方: 個人記入 → 5 4) グループで話し合う(ボストロイト共用) → 10 5) ノートの取り方の基本: ボストロイト共用 → 5	1) 情報読解 (10分程度) 2) グループワーク 3) 発表リレー	ワーク②: 読解を聞いてノートを取る ワーク③: ノートの取り方を考えよう A2用紙 A3用紙 ボストロイトを使った観念的の進め方 資料1: ノートの取り方の基本
30分	3. 振り返り <CR> (個人→グループ→全員) 1) 振り返りシート記入 2) 発表リレー 3) 振り返りシート記入	1) ボストロイト配入 2) 発表リレー 3) 振り返り	A4用紙 A3用紙 ボストロイト共用の進め方: グループワーク 発表リレー

教員用解説ページ	
1. 大学・大学生について考える	このセッションの要約 ① 大学の学びについて ② 大学の学びについて考える ③ 大学の学びについて考える
2. 情報読解・ノートの取り方	このセッションの要約 ① ノートワークの基礎 ② 授業実践を知る ③ 授業実践を知る
3. 振り返り	このセッションの要約 ① 振り返りシート ② 振り返りシート

参考資料1 『平成29年度「自立と体験1」教案』 pp.18-19 第3回授業(2017)

5. 授業の組織的展開における共通教案開発のためのガイドライン

先行研究と明星大学での実践事例から、共通教案開発のために何が必要かを探ってみる。

安永は、2005年度前期科目の未修得者対象のクラスを後期に開講し、前期の問題点を改善した実践的

証を行っている。「教育の目標は統一し、内容と方法は教員の専門性を生かしながら各自が工夫」、つまり教員に教育方法を一任する方法である(安永ほか2006)。3名の担当教員で行われたこの実践は質の高い授業となったが、この結果に対して、担当教員の質の問題を提起し、「授業改善に向けての自発性が乏しく、教育熱心でない教員が担当した場合、どれほど成果が期待されるか疑問である」と述べている。担当教員同士の密接な情報交換、意思疎通の前提があってはじめて、授業の質が担保されるということである。

教育工学では授業デザインを ADDIE モデルで説明する(稲垣・鈴木2015)。分析(analysis)、設計(design)、開発(development)、実施(implement)、評価(evaluation)のプロセスで授業づくりを行うというモデルである。共通教案、特に自分が直接開発に携わっていないもので授業を行う場合、ADD(分析・設計・開発)の部分を行わずに、いきなり実施のプロセスに入ることになる。その点が「教案なしでは授業が成り立たない」となり、一方で「逸脱が難しい」「画一化する」となるのだと考えられる。ADDに参画しない教員に如何にADDのプロセスを伝えるかという点が、今後のさらなる課題である。1つの観点として、教案では各回の授業に関する教授方略は詳細に取り上げられるのに対して、カリキュラム全体の設計についての説明が不足するように思われる。カリキュラム全体のストーリーと各回の授業と授業をつなぐブリッジも丁寧に説明することが必要である。

さらに、様々な教員が担当する授業においては、授業手法に不慣れな教員もいるし、十分に経験があり自身の工夫を生かしたいと考えている教員もいる。また授業方針に対して賛同できず担当意欲が不足している教員もいるかもしれない。そういった環境で授業を組織的に展開する際の共通教案開発の留意点としては、以下の点が考えられる。

- ①共通の教育目標、到達目標を具体的に記述する(カリキュラム全体のデザイン)
- ②各回授業ごとの教育目標、到達目標も記述する(授業ごとのマイクロデザイン)
- ③個々の授業回同士のつながりが理解できるようにする(ストーリー、ブリッジ)
- ③授業の進め方に慣れていない教員が担当する場合は、具体的な進行方法も記述する。
- ④授業の進め方の標準プランは詳細に記述するが、「その通り進めなくてはならないもの(制約)」ではなく、「その通りに進めると上手くいく可能性が高いもの(進行のヒント)」であることを記載する。
- ⑤教員の意欲に差がある場合は、「必ず実施する項目」を決めておくことが望ましい。
- ⑥教員の授業手法への慣れや経験に差がある場合は、「慣れている教員が変更してもよい部分」が分かるようにしておくこと、個々の工夫が活きる。

6. 共通教案を活かすための運営のポイント

授業の組織的展開のためには、「共通教案」「担当教員向けFD」「継続的な授業改善」が必要だという点は、これまで述べてきたとおりである。さらに、共通教案を活かすためには、組織的展開をサポートするための様々な運営の工夫が必要である。明星大学の実践例から、運営に必要な項目を挙げておきたい。

①学生自身が授業に主体的に取り組むための教材

担当教員向け教案とともに授業内で活用するものとして、学生向けの授業資料(ポートフォリオ)がある。教員の授業進行をサポートするためには、ポートフォリオに授業の全体像や個々の演習の進め方、振り返りの質問等を記載しておくことよい。それにより学生は教員の指示を待つのではなく、自ら主体的に授業に取り組めるようになる。

特にグループワーク等のアクティブラーニング型で授業を進行する場合、教員はファシリテーターとしての取り組みが求められる。それをサポートするものとして、学生向けの教材の必要性は高い。

②担当教員間の情報共有の場と機会の確保

教員同士の授業の工夫を共有する仕組みも必要である。最も効果的なのは実際の担当教員全員で定期的なミーティングを持つことだが、教員数が多い場合は物理的に難しい。「自立と体験1」では、参加自由のランチミーティングを授業実施日の昼休みに実施し、その中で共有された工夫や疑問等をニュースレターとしてまとめ、毎週担当教員全員に発信している。ランチミーティングの参加者は担当教員の2割前後にとどまるが、ニュースレターを通して実際の工夫を知ること、教案がより具体化され個々の教員の工夫の可能性(限界)を共有できる。また、担当教員をグループ化し、グループリーダーの MEC 教員と MEC 事務室が質問や相談の窓口となっている。何かあったときに誰に聞けばいいかが明確なことも、組織的運営には有効である。

③教職学協働の取り組み

これらの様々な運営の工夫は、MECの教員、職員と業務サポートを行う学生の教職学協働によって実現できていることも書き加えておきたい(御厨ほか2016)。組織的展開を担当教員個々の努力のみに委ねることは望ましいことではなく、大学全体として、教員・職員・学生がそれぞれの特長を活かしながら携わっていくことが必要不可欠である。

7. 終わりに ～ 共通教案開発の可能性

冒頭で述べたように、今後授業の組織的展開の必要性は高まり、それにより共通教案が開発される場面も増えてくることが想定される。本稿で見えてきたように、「理解しやすく、授業が進めやすく、担当意欲を維持できる教案」には、授業内容、担当教員などの現状に即した工夫改善が必要であり、唯一の画一化された正解を示すことは難しいだろう。今回得られた「教案開発のためのガイドライン」を実践の中で検証しながら、さらに精緻なものを見出していきたいと考えている。

また、教案開発のプロセスには、さらに新たな可能性が考えられる。まず、開発者にとっては、その授業の本質を整理することにもつながる。到達目標に達するために落としてはならないポイントは何かを考えることで、到達目標、教育目標の真の理解が得られる可能性がある。さらに、教案のつくり方によっては、共通教案を活用する教員個々のFDにつながる可能性もある。自身の慣れ親しんだ授業方法以外の進め方や学生へのアプローチを知ることは、改めて自分の授業の特長を知り授業改善への可能性を開く。

複数担当で組織的に授業を展開するための必要性という視点だけでなく、こういった共通教案開発の可能性を探ることを今後の研究課題としていきたいと考えている。

注

- 1 2013年に行われた「全国大学学科長調査」によれば、現在のカリキュラムが専門的能力よりも汎用的能力を重視していると回答した学部・学科が約3分の1存在している。山田(2016)はこの数年のカリキュラム改定で急増している傾向ではないかと分析している。
- 2 2012年度からは、「<教員向け>学生に習得してほしいこと」として、改めて左ページに掲載している。これは、担当教員が個々の工夫で授業内容や進め方を変える場合に、共通に意識してほしい点を明記するためである。
- 3 この点については、2012年度から『「今ここにある」学生たちの状況に合わせて、授業を進めていただくことが基本』との説明文を、表紙裏に記載している(鈴木2016)。
- 4 設問は、2010年度から2013年度までは、「以下の中で、授業運営に役立ったと思うものにすべて○を付けてください」。自由記述欄は、「またどういった点かも簡単にお書きください。ご意見などありましたら併せてお書きください」となっていた。2014年度以降はWEB上での回答となり、自由記述欄の設問が「授業運営に関するご意見がありましたら、具体的にお書きください」となった。そのため、自由記述の記入傾向が変化している。

参考文献

- 稲垣忠・鈴木克明編著 『教師のためのインストラクショナルデザイン 授業設計マニュアル Ver. 2』 pp.3-4 北大路書房 2015年
- 近藤伸彦 『初年次教育科目「情報活用」授業運営モデルの組織的な開発と実施』 大手前大学 CELL 教育論集第2号 pp.31-34 2010年
- 鈴木浩子、御厨まり子、菊地滋夫 『初年次教育授業の組織的展開のための担当教員FD－共通教案を用いた複数教員担当授業事前研修会実践報告－』 初年次教育学会第10回大会発表要旨集 pp.118-119 2017年
- 鈴木浩子 『初年次教育授業「自立と体験1」における学習意欲を高める取り組み(2)－担当教員からの動機づけに着申して－』 明星－明星大学明星教育センター研究紀要第6号 pp.145-150 2016年
- 御厨まり子、菊地滋夫、鈴木浩子 『明星大学全学初年次教育科目「自立と体験1」実践報告－新規に担当する教員を対象としたアンケート結果と教職学協同での授業運営－』 初年次教育学会第9回大会発表要旨集 pp.102-103 2016年
- 山田剛史 『現在のカリキュラムの特徴と運用状況』 日本高等教育開発協会、ベネッセ教育総合研究所編 佐藤浩章・山田剛史・樋口健編集代表 『大学生の主体的学びを促すカリキュラム・デザイン』 pp.35-42 ナカニシヤ出版 2016年
- 安永悟、石川真人、満園良一 『久留米大学における導入教育「共通演習」の成果と課題』 京都大学高等教育研究 (2006) 12 : pp.15-25 2006年
- 中央教育審議会 『新たな未来を築くための大学教育の質的展開に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申)』 pp.15-17 文部科学省 2012年8月28日
- 明星大学明星教育センター編著 『「自立と体験1」教案』 2010年度～2017年度(学内のみ公開)